

雑草通信

船津好明(1936年生まれ)

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返し、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さって構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

人と猫と蚤と鼠

(本稿執筆中の背後意識：地球環境問題、生物多様性の意義、理想郷)

猫は、山猫は別として、昔から人と共に暮らしてきた。人と共に暮らしてきた動物には、犬や馬、牛羊、豚、鶏などがあるが、猫の暮らし方はそれらとは違うように思う。

人の住む所には、今でもそうだが、都会的な所と、田舎的な所がある。昔は多くは田舎的であり、都会的な所は少なかった。田舎的な所は農家が多く、農家は穀物などを収穫し、貯蔵した。鼠が多くいて穀物を食べた。人間はこういう鼠を害獣とした。猫は本能的に鼠を捕食した。それで人間は猫を大切にした。

私の少年時代は昭和30年(1955)ぐらいまでで、田舎で暮らした。農家であり、穀物倉があり、鼠も多くいた。猫が一匹いた。雄で名はタマといった。タマがいつから我が家に住んだのか、覚えはない。よその家から貰い受けたものか、何かのきっかけで我が家に住み付いたものか、それも分からない。その頃の私は、タマを飼っている気でいたが、あとで考えると、飼っていると言うより一緒に暮らしていたという方が言い得ている。タマは自分で鼠を捕まえていたから、タマの食餌を用意することはなかった。首輪など、身には何も着けなかった。躰はせず、芸を教えるなどもしなかった。家に戸締りはなく、タマは家を自由に出入りした。

鼠は母家にも穀物倉にもいた。食べ物のある我が家は鼠の住み処であった。鼠は多くいて、居間に顔を出し、走り抜けることもあった。そんなときタマは鼠に飛びかかり、捕まえた。私も家人も舌鼓を鳴らしてタマを賞讃した。屋敷の傍に畑があり、タマは時々畑に行き行って前足で土を掘って窪みを作り、用を足して窪みを埋め戻していた。我が家はタマの自由な生活圏であった。

猫は寒がりな動物で、タマは寒い時期になると囲炉裏端にきて座り込んだ。家人はタマを追い払うことはしなかった。私などがあぐらをしていると、膝の間の窪みに入って丸くなって寝た。人肌の温かみが気に入ったのであろう。

家には蚤がいた。蚤は人畜に寄生して血を吸う。非常に痒い。人につく蚤は衣服の縫い目などに潜んでいて、人が着衣すると這い出して人肌に移り、肌を咬んで血を吸う。脱衣するときは衣服に戻り、縫い目に潜む。取ろうとすると跳ねて逃げる。指先で捕まえたときは、揉んで失神状態にして、親指の爪先で潰して退治した。

猫は蚤の格好の住み処であった。タマには蚤がたくさんいた。痒いとみえて口で痒いところを咬んだり後ろ足で蹴ったりしていたが、自分で蚤を退治することはできなかった。我が家は蚤の生活圏でもあった。こうして我が家には人間、猫、蚤、鼠が同居した。鼠と蚤は人間に害を、猫は益をもたらした。

我が家には、今思えば4種の生物がいて、それぞれが生活圏を持つ理想郷であった。蚤や鼠がいて、

人間の理想郷とは異なる感じがするが、人間の近くには有益なものばかりでなく、有害なものもいるというのが自然の節理で、理想郷とはその意味からいう。蚤や鼠がいなくても、人間は常に有害な生物に付きまとわれている。体内には雑菌が多種多数いて、悪玉と呼ばれる細菌も常にいて、これが増えて抑え切れなくなると人間は発病する。症状によっては死に至る。蚤と細菌は目に見えるか見えないかの違いに過ぎない。当時、蚤や鼠はどこの家にもいて、困りはするが、さほど深刻なことでもなかった。利害関係のある生物が同居しているという意味からも我が家は、大袈裟な言い方だが、自然の生態系の一つの略図であった。

蚤は私とタマの関係を深めることとなった。私がタマの毛を逆撫ですると、蚤がたくさん居て毛の間を泳ぐように逃げた。毛の中の蚤は跳ねない。私は蚤と毛を一緒に摘んで、蚤を爪先で潰して退治してやった。タマはおとなしく私に身を任せていた。蚤はたくさんいて、毛の間に蚤の卵らしいものがあちこちにあった。それも潰してやった。根気よく何回もした。その結果タマは私を一層信頼するようになった。

その頃学校では生徒の蚤や虱の駆除のため、DDT という粉末の殺虫剤を生徒の頭から振り掛けた。我が家では DDT は使わず、各自が手で取った。指先で捕まえて爪で潰した。視力の弱い祖母は口で蚤を取った。衣の縫い目を口に当てながら、縫い目を広げていくと、縫い目に潜んでいた蚤が跳ねて口の中に飛び込むのであった。

寒い季節、私は寝るとき一人で寝るが、朝目が覚めると腰の辺りが何となく暖かい。手で探るとタマであった。私が眠っている間に肩の隙間から蒲団に潜り込んだらしい。私が登校のため家を出るときは、門まで付いてきて見送った。私が学校から帰ってきたときは、足音で分かるらしく、門まで出迎えた。私とタマとは親密な仲となった。

世の中には猫嫌いの人がいる。人間嫌いの猫もいる。何かのきっかけでそうなるのであろう。都会は最早猫にとって野生的に生きる環境ではない。鼠はいないし、人間の愛玩動物として生きるのは増しな方で、商品になり、事業に使われたりしている。人間が食餌を与えなければ猫は生きられない。人が飼う猫はまだよいが、飼い主のいない猫は生活に困る。世話をしようと餌を与える人は、猫嫌いの人から非難される。そんな猫たちは人を見ると逃げる。

猫狩りと言われる人があるという。猫を捕まえて業者に売り、猫は殺されて皮が三味線にされると聞いたことがある。猫が人を見て逃げるのは、人間に捕まることは死を意味すると本能的に思うからであろう。残念ながら、都会に生きる野良猫にとって、人を避けるのは生きる術なのであろう。

猫などの愛護に関しては法律もあり、行政指導もなされている。残虐を戒めるのはよいが、特に都会的な所では、猫は人間の都合に従わせざるをえない。犬なども同様である。

生物多様性という言葉が知られつつある。地球に色々な生物がいることを意味する。生物には植物も含まれる。地球環境保全の観点から、生物の多様な状態を維持していこうという考え方には大筋で賛同できるし、その意味合いには深いものを感じる。国際会議も重ねられ、方向付けがなされているが、実行は簡単でない。前記の人、猫、蚤、鼠の係わり方も生物多様性の考え方に関係がある。(続)